

なぜなぜ分析の活用

2013.09.02





石川 紀夫

作業現場では、日々のTBM（ツールボックスミーティング）、KYK（危険予知活動）、HH活動（ヒヤリハット）、2S活動（整理・整頓）、計画的な安全パトロール、RA（リスクアセスメント）などを進めて作業の安全に努めていますが、災害ゼロの達成は容易ではありません。

もし、災害が起こったら、発生状況を調査し、災害原因となった「不安全な状態」と「不安全な行動」を特定し、分析検討して災害発生の重要な契機となった要因を明らかにし、適切な対策をたてて、類似災害の発生防止を計らねばなりません。

この分析検討に際し、「なぜなぜ分析」を上手く活用すれば、感情に流されず、関係者が納得できる原因究明と対策に繋ぐことができます。私が指導する「なぜなぜ分析」の進め方と注意点を紹介します。

分析の手順

①事実の確認	事実を確認し、時系列に整理する。
	【注意点】 ここでは、①推測を入れない、②個人の責任追及に陥らない、③具体的・定量的な情報入手に務める、④類似災害の再発防止が目的との姿勢を貫く、などが大切です。
②直接原因の特定	事実から、直接原因である「不安全な状態」と「不安全な行動」を特定する。
	【注意点】 災害が起こるのは、二つの不安全な事象が重なったときです。この事象がなかったら災害に至らなかったと考えられるものを取り上げます。
③なぜなぜ分析	事象別に、なぜなぜ分析を行う。
	【注意点】 ここでは、「なぜ」を飛躍させないで、シンプルに考えられる事象の連続で表現します。上手く出来れば、「なぜ」を逆に読んでも理路整然として流れに飛躍がありません。当たり前と思われる所に盲点があるものです。柔軟な思考で注意深く「なぜ」を繰り返し、可能な限り掘り下げていきます。
④原因の究明	根本原因を究明する。
	【注意点】 「不安全な状態」と「不安全な行動」の各々について、人的要因、設備的要因、作業的要因、管理的要因の切り口で検討を進め、根本的原因の究明を図っていきます。

この「なぜなぜ分析」は災害防止に限らず、製品クレーム対応、製品品質管理、設備トラブル対応、現場の改善まであらゆる事象にも適用できます。コンサルタントは手法を修得されるまで、支援・指導いたします。

以上